

本日 TOEIC 単語学習の授業で **led** という単語が出てきました。lead・led・led 変化します。ではなぜ **read** は read・red・red と変化しないのか？ ということで再度説明したいと思います。…hellog より加筆修

1066 年から 15 世紀後半までの（日本の鎌倉～室町時代に対応）英語を**中英語**といい、また 1500 年頃から現代までの英語を**近代英語**といいます。

中英語後期、1400 年代の初頭から、英語では原因不明の発音の変化が起こっています。これを「**大母音推移**」と言います。その名のとおり、この発音の変化は母音にだけ起こっていて、変化以前は綴りどおりの発音、発音どおりの綴りだったのですが、現代英語において綴りと発音が大きく異なる大きな原因になっています。（英語アルファベットの名称の特異性の原因となります； A ア→エイ、 E →イー、 I →アイ、 O →オウ、 U →ユー）

中英語における"read"の発音は、子音は現在と同じですが、母音は話者によって/æ/、/ɛ/、/a/の三つに分かれていました。それでも当時から、現在形では長母音、過去形・過去分詞形では短母音と分かれていたようです。母音推移を経て、read の母音は現在形では/i:/、過去形では/ɛ/となりました。

短母音化した過去形と過去分詞形の語幹母音を表わす綴りとしては <e> 辺りが最もふさわしかったと思いますが、<red> では「赤」を表わす**同綴り異義語と衝突**(homographic clash) してしまう恐れがあったため、一般化することはありませんでした。この "homographic clash" とでも呼ぶべき説明原理は、*OED* "read, v." の語源欄で与えられているものです。

The present-day spelling of the past tense and past participle forms is analogous to the present tense; the spelling **red** for past tense and past participle is found **only in isolated instances** in the modern period and was **perhaps avoided because it coincided with the standard spelling of RED adj.**

**lead(v.)** も **read** と同様の歴史をたどりましたが、綴字は発音と密接な関係を保ち続け、現代標準英語では **lead-- led-- led** へと落ち着くこととなりました。

本日 TOEIC 単語学習で **magic -e** のお話をしました。中学校英語では cake, game, name / Pete, eve / bike, like, time / home, nose, rose / cube, cute, tube と理屈が通っていますが、突然 come, love, some, が現れます。通常**例外**として扱われ through されますが、釈然としません。ということで再度説明したいと思います。

## <u> の代わりに <o> を使った？

タイトルの2つの高頻度語の綴字には、末尾に一見不要と思われる *e* が付されています。なぜ *e* があるのかというと、なかなか難しい問題ですが、歴史的にも共時的にも <o> が表わしてきた母音は短母音であり、"magic <e>" の出る幕はなかったはずです。

手短かに話を進めると、<o> = /ʌ/ の部分に着目すれば、これは中英語における <u> の <o> による代用 によるものといえます。いわゆる "minim avoidance" の説明です。

英語綴字史において、<u> を <o> で代用する習慣については標準的な見解によると、母音を表す <u> はゴシック書体では縦棒 (**minim**) 2本を並べて <<uu>> のように書かれてきましたが、その前後に同じ縦棒から構成される <m>, <n>, <u>, <v>, <w> などの文字が並ぶ場合には、文字どうしの区別が難しくなります。この煩わしさを避けるために、中英語期の写字生 (scribe) は母音を表す <u> を <o> で置換しました。かくして、<sume> は <some> へ、<sun> (息子) は <son> へ、<luue> は <loue> へと置換され、それが後に標準化したのだということです。

Jespersen の以下の引用が、この説明の典型を与えてくれます。



In ME texts of a more recent date (Chaucer, etc.) we find **o used still more extensively for /u/**, namely in the neighbourhood of any of the letters *m*, *n*, and *u* (*v*, *w*). The reason is that the strokes of these letters were **identical**, and that a multiplication of these strokes, especially at a time when no dot or stroke was written over *i*, rendered the reading **extremely ambiguous and difficult** (five strokes might be read as *uni*, *nui*, *uui* (uni or wi), *iuu* (ivu or iw), *mii*, *imi*, etc.). This accounts for the present spelling of *won*, *wonder*, *worry*, *woman*, *monk*, *monkey*, *sponge*, *ton*, *tongue*, **some**, *Somerset*, *honey*, *cover*, *above*, **love** (ME *loue* for *luue*) and many others.

オットー・イエスペルセン (Jens Otto Harry Jespersen イェンス・オト・ハーイ・イエスパスン、1860年7月16日 - 1943年4月30日) は、デンマークの言語学者。専門分野は英語の文法

Carney によれば、現在の標準的な綴字において、語源的に <u> が期待されるところで、<m> や <n> の前位置にある場合に <o> として現われる単語は確かに非常に多いと言えます。(ex. *become*, *come*, *comfort*, *company*, *compass*, *somersault*, *conjure*, **front**, *frontier*, *ironmonger*, **Monday**, **money**, *mongrel*, *monk*, **monkey**, **month**, **son**, *sponge*, *ton*, *tongue*, *wonder*) 。

また、中英語で <<uu>> と綴られた <w> の後位置に <u> が現われる環境においても、綴字はひどく読みにくくなりますから、現代英語の *wolf* に相当する <uuulf> が <uulf> と綴られることになったのも納得することができます。なお、古英語では <<uu>> の代わりに <p> が用いられたので縦棒問題は生じず、順当に <pulf> と綴られました。